和歌山縣人

在京和歌山県人会会報　第175号
編集兼発行人　谷口博昭
発行所　在京和歌山県人会
〒102-0093 東京都千代田区平河町２-６-３
都道府県会館12階
電話（03）5212-9057（代表）直通
ＦＡＸ（03）5212-9059
振替　００１９０-９-３０２３９

（題字は初代野村会長筆）

謹賀新年　令和四年元旦

根本大塔（高野町）

（目　次）

年頭のご挨拶……本会会長・谷口 博昭…（１）
新春ごあいさつ……和歌山県知事・仁坂 吉伸…（２）
新年のご挨拶……和歌山県議会議長・森　礼子…（３）
新春随想……上田 富三…（４）
濱口 道雄…（５）
大西 正梧…（６）
桝高　修…（７）
郷土だより……（８）

年頭のご挨拶

在京和歌山県人会
会長　谷口博昭

明けましておめでとうございます。
会員の皆様方におかれましては、ご壮健で良き新年をお迎えのことと存じます。

昨年は、一昨年に続き新型コロナウイルス感染禍で恒例の総会と懇親会を開催することが叶いませんでした。和歌山県は仁坂知事はじめ関係者のご尽力により感染拡大を最小限に防ぎ他地域の模範です。関係者のご尽力に改めて敬意と感謝の意を表すると共に今後への遺漏なき備えをお願いする次第です。

昨年５月末、在京和歌山県人会諸活動に長年に亘りご尽力戴きました中野美智子様が逝去されました。会員の皆様に周知出来なかったことをお詫び申し上げると共に改めて中野様のご尽力に感謝しご冥福をお祈り致します。斯様な事情とコロナ禍により滞っていました現状報告と今後の運営ですが、和歌山県東京事務所のご協力を得て昨年12月15日常任理事会開催に漕ぎ着け、一定の方向が得られました。本年1月の理事会を経て会員の皆様方にお諮りする予定です。宜しくご理解、ご協力のほどお願い申し上げます。

さて、コロナ感染禍は大都市の脆弱性を諭し、首都直下地震や南海トラフ地震等の災害リスクを緩和するため、分散型国土形成を求めます。昨年は「紀伊半島水害」から10年という節目の年でしたが、安全・安心の向上と共にテレワーク等の浸透により可能となった大都市での就職と地方での居住の両立を図るため、「国土強靭化」と「地方創生」の加速が欠かせません。

昨年の秋には県誕生150年記念の年に「紀の国わかやま文化祭2021 ～山青し海青し文化は輝く～」が盛大に開催され、今後も文化の香り高い政策の展開が期待されます。12月には「有田IC ～印南IC」４車線化完成、串本太地道路工事着手など近畿自動車道紀勢線の早期完成に向け着実に整備が進められています。今後とも県勢発展の骨格である陸海空交通体系整備促進が期待されます。

また、今年の春には串本町に建設中の民間小型ロケット発射場「スペースポート紀伊」が完成し、一号機の発射が待たれます。

県人会は素敵な出会いの場、交流の場であります。県人会創設の先人達の熱き想いを大切に、県勢一層の飛躍のため、諸先生や県当局のご指導やご支援を戴きながら郷土愛精神を持って種々の活動に努めてまいりたいと想います。皆様方のご協力、ご支援をお願い致します。

結びに、コロナ感染禍が終息し、本年が会員の皆様と和歌山県にとって幸多い年となることを祈念して年頭のご挨拶と致します。

新春ごあいさつ

和歌山県知事
仁坂吉伸

あけましておめでとうございます。

謹んで、在京和歌山県人会の皆さんに新春のお慶びを申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症の波が何度も打ち寄せ、そのたびに医療崩壊の危機にさらされました。しかし、和歌山県では、保健医療行政による感染の抑え込みに全力を尽くすことにより、感染者の全員入院を最後まで堅持することができました。

また、東京2020オリンピック・パラリンピックで、アスリートの皆さんが力の限りを尽くして競技に臨む姿が、日本中に感動を与え、コロナ禍で沈みがちな気分を晴らしてくれました。県内でも、多くの方々を迎えて「紀の国わかやま総文2021」、「紀の国わかやま文化祭2021」を開催し、「文化の咲き誇る和歌山」を実感することができました。

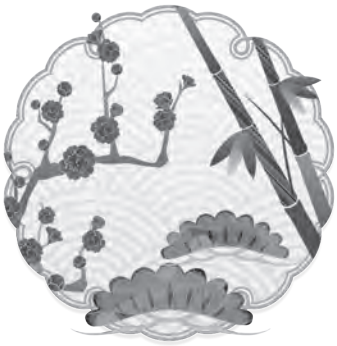
今、世界を見ると、DX（デジタルトランスフォーメーション）が加速度的に進むなど、コロナ禍を契機として人々の働き方、暮らし方は、大きく変わってきています。

こうした状況の中、地域経済を支え、成長させるためには、この機を逃すことなく、新たな施策を展開し、ポストコロナ時代に挑み、和歌山を力強く飛躍させなければなりません。

そのため、本年は、「DX和歌山」の実現に向けて、県庁内にDX本部を立ち上げ、行政のあらゆる分野において、DXを強力に推進します。また、テレワークの普及など地方分散の流れを追い風に、「個人移住」、「農林水産業の担い手としての移住」、「企業誘致に伴う移住」及び「転職なき移住」の４方面をターゲットとして、和歌山へ多くの皆さんをお迎えし、企業にも和歌山へ来ていただきたいと考えています。

折しも今年は、串本町の日本初の民間小型ロケット発射場で、小型ロケット「カイロス（KAIROS）」の初打ち上げを迎える予定です。本年が和歌山県にとっても、新たな世界へと飛躍を遂げる希望の年となるよう、引き続き全力を尽くしてまいります。

この一年が、在京和歌山県人会の皆さんにとって幸ある年となりますことをお祈り申し上げ、年頭のごあいさつといたします。



新年のご挨拶

和歌山県議会議長
森　礼子

あけましておめでとうございます。

春が来て草木が芽生える躍動の寅年、令和４年となりました。

まず、新型コロナウイルス感染症に対し、最前線で治療にあたられている医療従事者の皆様をはじめ、何かと御不便な状況の中、感染症対策に御協力くださる全ての皆様に心より感謝を申し上げます。

昨年後半には、「新規感染者なし」の日が続くなど、収束に向け明るい兆しも見られましたが、新たな変異株の流行が報告されるなど、まだまだ予断を許さない状況であり、今後とも、行政等が発する対策情報に御留意いただきたいと思います。

さて昨年、和歌山県は誕生150年を迎えました。

延期されていた東京2020オリンピック・パラリンピックは感染防止対策が施される中開催され、本県岩出市出身の四十住さくらさんが金メダルを獲得しました。また、一昨年に中止を余儀なくされた全国高等学校野球選手権大会では、来場者を制限するなどの措置を行いながら実施され、見事、智辯学園和歌山高等学校が全国制覇を成し遂げられました。

そして、文化芸術活動の発表･交流などを行う国内最大の文化の祭典「紀の国わかやま総文」「紀の国わかやま文化祭」が本県で初めて開かれ、大成功を収めるなど、元気と感動が溢れた１年でもありました。

私がたくさんの方々とふれあう中、地域の特色を磨き、盛り上げておられる方が多いことに改めて驚き、また、誇らしい気持ちになりました。これからも、高齢者、女性、子供、障害者といった方々の目線で、地域に、生活に密着した取り組みを進め、本県が抱える、人口減少や災害対策、また、道路やライフライン等整備の遅れ、日常が自家用車に頼らざるを得ないことなど、様々な課題の解決に活かしてまいりたいと考えています。

県議会といたしましても、皆様のお声を聴き、持てる力を飛躍や成長に繋ぎ、ふるさとに元気が戻るよう努力してまいりますので、引き続き、御支援、御協力をお願い申し上げます。

結びに、在京和歌山県人会のますますの御発展と、この一年が県人会の皆様にとってより良い年になりますようお祈り申し上げ、年頭にあたっての御挨拶といたします。

新春随想

アフターコロナの「新・デジタル時代」

アドソル日進（株）代表取締役会長　上　田　富　三
（橋本市出身）
（昭和26年９月生）

新年、明けましておめでとうございます。

私は紀北(橋本市)の出身で、高野山の紀ノ川河畔で生を受け、現在は東京で会社経営の日々です。昨年は無事に古希を迎えました、心よりお礼を申し上げます。

一昨年から世界中に広がった新型コロナウイルスによる「パンデミック」は、我々全ての国民に大きな被害と影響を与えました。しかし、その中で今まで見えていなかった色々な事が分かりました。国産ワクチン準備不足・緊急時の医療体制・ウイルス感染症への情報不足等。テレビや新聞の報道に日々、一喜一憂しておりました。又、毎日の生活では、密を避ける為に、「出社制限」や「自宅でのテレワーク」など「ソーシャル・ディスタンス」に各々が積極的に対応して来ました。

この様な状況で、日本も世界も日々発生する「色々なデータ」を、如何に早く安全に集めて分析し、「そのデータ」を国民や企業に早く還元し、利活用するか？　の重要性に注目が集まりました。我々はその分析データを見て判断・行動するのです。その為に組織体制の見直しや、スマートフォン・パソコンの積極的な活用等が、重要な優先課題となって来ました。

今まさに「デジタル社会・時代」が到来したのです。個人や企業、官公庁や自治体の全てが対象です。そして、その「デジタル時代」が、「地方活性化」・「地域格差解消」の「切り札！」になると思います。大都市に集中して来た「人・もの・情報」が、通信ネットワークで繋がる時代へ。
コロナ禍がその未来を見せてくれました。
今後は「和歌山県」や地方が有利な立場となります。又、「アジアの国々」とも連携強化して取り組む事が期待されております。ITの黎明期から40年来、システム開発事業に取り組んで来た、私の実績と経験を活かし、「新・デジタル時代」における故郷の発展の為にお手伝いが出来れば幸いです。

末筆になりますが、昨年５月に県人会の事務局を担当しておられた「中野美智子さん」が急逝されました。彼女は、和歌山の地元の市町村や企業と、東京の官公庁や企業を繋ぐ「橋渡し役」として活躍されておられました。彼女にお世話になった方々は多くおられると推察いたします。県人会の発展に尽くされた事に感謝致します。中野さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

新春随想

「新作オペラ 稲むらの火の物語―梧陵と海舟」を鑑賞して

ヤマサ醤油株式会社 代表取締役会長　濱　口　道　雄
（広川町出身）
（昭和18年５月生）

昨年11月の小春日和の週末に家内と共に和歌山市を訪れた。羽田から関空に飛び、レンタカーで新しく完成したばかりの和歌山城ホールを目指した。当家の先祖、濱口梧陵の稲むらの火の逸話がオペラになって公演されるというので、それを見るのが目的である。

稲むらの火の逸話は演劇や人形劇など色々な形で上演されてきたが、それでもオペラというのは初めてではないだろうか。題して「新作オペラ　稲むらの火の物語―梧陵と海舟」は「紀の国わかやま文化祭２０２１」の数多くのイベントのひとつであるので、イベントの性格上、何とたった一日のたった一回の上演と聞き、この日を逃すと二度と見ることのできない貴重な機会ということで何はさておき駆けつけたわけである。

初めての和歌山城ホールは一階にレストランがあるせいもあってか、人の往来が絶えない週末の賑わいを感じさせる場所にあった。二階のホールの入り口では大勢の人がすでに長い行列を作っていた。入場すると会場はほとんど満席で、コロナの蔓延が上手にコントロールされてきた和歌山県だからこそ、と感心をした。

このオペラは和歌山市民オペラ協会の多田会長が濱口梧陵の功績をオペラを通して人々に伝えたい、という思いから企画されたそうであるが、実際オペラは稲むらの火の出来事を舞台の上で再現しながら、梧陵と勝海舟の交流をテーマに描かれていた。事実梧陵は勝海舟と歳は離れていたが大変昵懇であったと聞いているから耳を立てて聞いていたが、決してオペラに仕立てるために自由に脚色されたものではなく、その内容は史実に忠実なものであった。歌声で津波の恐ろしさを表現したい、というのがこの企画の肝の一つであったそうだが、さすがオペラならではの表現で、見せ場であった。梧陵と海舟という男性二人の主役も朗々たる歌声で演じ、正直なところ鑑賞前は、稲むらの火のような物語がどの程度オペラで表現できるものかと心配をしないわけではなかったが、それは無知な輩の杞憂であることが分かった。

ということで、このオペラは大成功を収めたわけであるが、我々夫婦の来場を多田会長が大変喜んでくださったことは我々にとっては望外のことで真に光栄であった。幸い公演終了後多田会長と立ち話であったがいろいろお話を伺うことができた。ご高齢にもかかわらずこの公演にかけた情熱がひしひしと伝わってきて、この公演の成功の裏にはこの熱意があってこそ、と確信させるものがあった。

いずれにしても稲むらの火の逸話がこのように新しくオペラという形で上演されたことは従来になかった試みで、大変画期的なことと喜んでいる。これによって更に多くの人がこの逸話を知ることとなり、人々の津波防災の意識向上につながればと念願する次第である。

新春随想

この歳になって改めて思う「和歌山良いとこ」

大西国際特許事務所　大　西　正　梧
（伊都郡九度山町出身）
（昭和25年３月生）

新年あけましておめでとうございます。

私は今年が年男の72歳です。高校（伊都高校）を卒業した後、大学時代は大阪府箕面市で下宿生活し、卒業後就職して以来今まで埼玉県に住んでいます。人生の約1/4を過ごしただけの和歌山県ですが、改めて「和歌山良いとこ」と故郷を思い直しています。

九度山町慈尊院で生まれ育ったのですが、いくつか「和歌山良いとこ」自慢があります。まず、九度山町ですが、関ヶ原の戦いの後、真田昌幸、幸村親子の幽閉場所として知られており、現在も真田庵がその歴史を残しています。池波正太郎著の小説「真田太平記」に「紀州九度山」という巻があり、真田親子に関連して九度山のことが書かれています。

次に「慈尊院」ですが、慈尊院というお寺があり、お寺の名前がそのまま地名となっています。「慈尊院」は、高野山が女人禁制であったため、弘法大師がお母さんのために建立した由緒のあるお寺で、高野山から慈尊院まで町石道が続いています。高野山を起点として慈尊院まで続くおよそ180町の長さの道であり、１町おきに高さ５ｍ程度の大きな卒塔婆形の町石（最初は木製だったよう）が合計180基建てられていたことが由来となっています。今でもかなりの町石が残っており、慈尊院の奥の石段横には180番目の町石が残っています。現在は町石道がハイキングコースとなっています。

慈尊院は安産祈願のお寺として知られており、乳房型の絵馬が沢山奉納されています。有吉佐和子著の小説「紀ノ川」に、主人公が安産祈願に慈尊院にお参りすることが書かれています。また、慈尊院は世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれており、その本尊「弥勒菩薩像」は国宝指定されています。

個人的な「和歌山良いとこ」として、我が母校「伊都高校」があります。私が通学していた当時は、昼食時間に男子は弁当を持ってグラウンドに出て芝生の上で食べ、女子は教室を専有して弁当を食べるという特有の伝統がありました。現在の県人会副会長の瀧井道治さんは同級生で、彼が持参する沢庵「コンコ」をお裾分けで頂き、グラウンドで美味しく昼食を食べたのが懐かしい思い出です。

伊都高校では多くのユニークで良い先生に恵まれたのですが、特に数学担当の大村一成先生が思い出されます。叱られて机の上にクラス全員が正座させられるなど、凄く恐い先生でした。しかし、授業は分かりやすく、本当に生徒思いの先生でした。大学受験の合格報告に先生の家に夜伺うと、まず先生の奥様から紅茶が出され、その紅茶にはブランデーがたっぷり入ってました。既に何人も報告に来ていたのですが、先生から「大学に入ると酒も麻雀も覚える必要がある」と言われ、早速みんなで麻雀を教えて貰いました。さらに「おまえ達は田舎で野放図に育ったから都会の進学校の受験勉強漬けだった者たちに比べてまだまだ余力がある。大学では遊べ、それから社会にでて余力を生かして頑張れ。」と言われました。おかげで、今年年男の72歳ですが、まだ余力を生かして仕事を続けております。ただ残念ですが、伊都高校は2017年を持って閉校となっています。

長々と自分の生まれ故郷和歌山を自画自賛するような記事で恐縮ですが、新年の随想とさせて頂きます。

皆様、今年も良いお年をお過ごし下さい。

慈尊院　2019年3月末

新春随想

浦安と古座と

(株) オリエンタルランド　桝　高　　修
（古座川町出身）
（昭和33年10月生）

新年あけましておめでとうございます

毎朝４時頃目が覚めて目を閉じて寝たままテレビのNHKニュースを聞いている。同じニュースが30分毎に繰り返し放映されるので７時頃には、主な出来事は頭に入ってきている。新聞を読むより効率的だと新聞から遠ざかっていた。しかしそのニュースはまだテレビで放映される対象にはなっておらず聞くことはなかった。当時、社内では食事以外に自由になる時間はなく、この日、偶然30分程の時間ができ、久しく読んでいなかった新聞を開いた。2020年１月６日、その記事は新聞の片隅にわずか４cm四方程で掲載されていた。「中国の武漢で原因不明の肺炎が発生。」海外出張の担当をしていなければ見落としていた。これが未だに終わらない禍の始まりだった。１月末には、中国への出張を禁止し、順次、出張の範囲を狭めていった。主力事業である東京ディズニーリゾートの営業は、３月から長期の閉園を余儀なくされた。東日本大震災時の休園期間を遥かに上回った。

故郷古座川町では、実家から徒歩数十歩のところに津波避難センターを建てていただいた。残念なことに実家に既に父母はいない。父は一昨年、５年間お世話になった高瀬会の運営するあじさい苑という介護施設で他界した。最期の11日間、父の部屋に泊めていただき見送った。スタッフの献身的な対応を目の当たりにし敬服した。この方々の善良なる心のあり方を礎にして、多くの親達の命と尊厳がそこに託されている。そして母も現在、同じ施設でお世話になっている。父母はいないが、実家近隣の住民にとって心強い施設であり、関係された方々のご尽力に深く御礼申し上げたい。父の一周忌で訪れた旧古座町の青原寺（せいげんじ）という寺の山門のソテツの周辺に群れ飛ぶ小さな青い蝶を見た。気になったが、時間がなく、同じ時期にここに来れば、見定めることができると記憶に留めて山門を後にした。

その１年後、三周忌で訪れた昨年の夏、小雨の中、同じ山門でその蝶を観た。見たことの無い蝶であった。撮影して調べると、クロマダラソテツシジミというフィリピン等に生息する南方系の蝶であった。相当に温暖化が進んでしまっている。SDGsを連呼するメディアよりも、この小さきものたちの無言の警鐘がその重要性を際立たせ、私の身に沁みた。

昨年12月１日。翌日の在宅勤務の準備をして仕事を終え帰途につく。舞浜駅前の信号機に足を止められ青になる時刻を読んでいた。待っている多くの人々の誰よりも先に一歩前に足を踏み出し、靴底が地面に着いた瞬間、後方頭上の空高く大きな爆発音が次々に炸裂した。午後８時、TDL（東京ディズニーランド）からあげられた10カ月ぶりの花火であった。駅前では多くの人々が微動だにせずじっと見つめていた。きっと人類はこの禍を超えていける。

会員の皆様のこの一年のご健康とご多幸を心より祈念申しあげます。

郷土だより

和歌山県誕生150年

明治４年の廃藩置県後、当時の紀州は和歌山県、田辺県、新宮県等に分かれていましたが、同年11月22日、この３県が統合して、現在の和歌山県が誕生したことから、昨年に現在の和歌山県が誕生して150年を迎えました。

和歌山県の成り立ち

紀伊半島に位置する和歌山県は、古来「紀伊国（きのくに）」と呼ばれていました。国内には、伊都・那賀・名草・海部（あま）・安諦（あて）（在田（ありだ））・日高・牟婁の７つの郡があり、国府は今の和歌山市府中に置かれていました。

以降、室町時代までは地方豪族や在地武士団の盛衰が繰り返されますが、天正13年（1585年）の豊臣秀吉の紀州攻めによって、一応の平定をみることとなります。

関ヶ原の戦い後、浅野幸長が若山城に入り紀伊を治めましたが、元和５年（1619年）、紀伊と南伊勢を合わせた55万５千石の紀州藩主として、徳川家康の第10子頼宣が若山城に入城し、紀州藩は徳川御三家として重きをなしていました。このとき安藤・水野両家老が田辺・新宮に支藩として配され、それぞれ田辺城（３万８千石）と新宮城（３万５千石）を治めていました。

明治２年（1869年）紀州藩は、和歌山藩・田辺藩・新宮藩の３藩に分けられますが、明治４年（1871年）廃藩置県によりそれぞれ藩から県に変わり、同年11月22日に３つの県と五條県の旧高野山領が統合され今日の和歌山県が誕生しました。

紀伊国・和歌山県の由来

和銅６年(713年)に、二字の好字を用いて国名をつけるようにとの中央官令があり、この時から「紀伊国」と表記されるようになりました。『日本書紀』ではこれを「きのくに」と訓（よ）み、これは本県がはじめ「木の国」と呼ばれていたことに由来します。

また、「和歌山」の名の由来ですが、元々、和歌山というのは上代の国府、藩政時代の藩主の居住地であった地の呼び名で、その名の由来については諸説あるうち、昔から和歌浦の名が最も知られていたので和歌山の名ができたという説が有力です。藩政時代には「若山」に統一された時期もありましたが、再び「和歌山」に改められました。

※本文は『和歌山県政史 第１巻』を参考にしています。

廃藩置県の頃の地図（出典：和歌山県政史 第１巻）

和歌山県の誕生日は11月22日

和歌山県は誕生以来、多くの先人が今に至る歴史を紡いできました。平成元年７月に公布した「**ふるさと誕生日条例**」では、ふるさと誕生日を11月22日と定め、「県民が、郷土についての理解と関心を深め、ふるさとを愛する心をはぐくみ、自信と誇りをもって、より豊かな郷土を築きあげることを期する日」としています。

和歌山県提供

《和歌山県の150年》

0	明治	明治4年（1871年）　和歌山・田辺・新宮三県を廃止し、和歌山県を設置 五條県を廃止し、旧高野山領を和歌山県の管轄とする（和歌山県誕生）
		明治12年（1879年）　第１回県会開会、議員総数43人、初代議長は濱口儀兵衛（梧陵）
25		明治23年（1890年）　トルコ軍艦エルトゥールル号が大島沖で遭難、死者587人
		明治36年（1903年）　南海鉄道（現南海電気鉄道）（難波⇔和歌山市）が全線開通① 和歌山市で電話開通
	大正	大正9年（1920年）　第１回国勢調査、県人口 750,411人
50	昭和	昭和5年（1930年）　阪和電気鉄道（東和歌山（現和歌山駅）⇔天王寺）全線開通
		昭和11年（1936年）　紀伊半島南部が吉野熊野国立公園に指定される 前畑秀子、ベルリンオリンピック女子平泳ぎ200mで優勝
		昭和13年（1938年）　和歌山県庁舎（現庁舎本館）が現在地へ新築移転②
75		昭和20年（1945年）　和歌山市大空襲、死者1,212人※、和歌山城焼失
		昭和24年（1949年）　国立和歌山大学設置 湯川秀樹が日本人初のノーベル賞（物理学賞）を授与される
		昭和33年（1958年）　和歌山城再建
		昭和40年（1965年）　紀勢本線に特急「くろしお」号新設③
		昭和43年（1968年）　南紀白浜空港が完成し、白浜⇔東京間に定期便を就航
100		昭和46年（1971年）　第26回国民体育大会「黒潮国体」開催④
		昭和49年（1974年）　阪和自動車道開通（阪南IC～海南IC）
		昭和54年（1979年）　県立箕島高等学校野球部が甲子園で春夏連覇達成⑤
	平成	平成6年（1994年）　和歌山マリーナシティが完成し、「世界リゾート博」開催⑥
125		平成16年（2004年）　「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコ世界遺産に登録⑦
		平成18年（2006年）　平成の市町村合併で９市20町１村に
		平成27年（2015年）　第70回国民体育大会「紀の国わかやま国体」開催 第15回全国障害者スポーツ大会「紀の国わかやま大会」開催 「みなべ・田辺の梅システム」が世界農業遺産に認定
150	令和	令和3年（2021年）　和歌山県誕生150年

※は数値が資料によって異なるが、「和歌山市庶務課事務報告書」による。
写真提供：①②和歌山市立博物館、⑤箕島球友会、⑦（公社）和歌山県観光連盟

①南海鉄道が全線開通（明治36年）

②落成当時の和歌山県庁舎（昭和13年）

③特急「くろしお」号（昭和40年）

④黒潮国体の入場行進（昭和46年）

⑤県立箕島高等学校野球部が甲子園で春夏連覇達成（昭和54年）

⑥「世界リゾート博」開催（平成6年）

⑦紀伊山地の霊場と参詣道（平成16年）

和歌山県提供

県議会議長に森礼子議長が就任

和歌山県議会は６月９日の定例議会で**森礼子**議員（和歌山市選挙区、４期目、自民党）を女性初となる新議長に、**鈴木太雄**議員（田辺市選挙区、３期目、自民党）を副議長に選任。森議長は、「円滑かつ適正な運営による議会の権威保持に傾注することはもとより、県民の皆様に心から微笑んでいただけるよう懸命に取り組みたい」と抱負を語っている。

近畿自動車道紀勢線　有田IC・印南IC間の４車線化が完成

有田IC－印南IC間の４車線化が12月18日に完成しました。また、未整備区間としては、すさみ串本道路が令和７年春の完成予定で、串本太地道路は12月に事業が着工されるなど、紀伊半島一周高速道路の実現に向け着々と整備が進められています。

新たに２つの地域が日本農業遺産に認定

日本農業遺産は、我が国において将来に受け継がれるべき伝統的な農林水産業を営む地域を認定する制度です。この度、「聖地高野山と有田川上流域を結ぶ持続的農林業システム」および「みかん栽培の礎を築いた有田みかんシステム」が２月19日に新たに日本農業遺産に認定されました。

聖地高野山と有田川上流域を結ぶ持続的農林業システム （高野町・かつらぎ町（花園）・有田川町（清水））	**みかん栽培の礎を築いた有田みかんシステム** （有田市・湯浅町・広川町・有田川町）
高野六木制度により100を超える木造寺院を維持。傾斜地での仏花栽培や畦畔を利用した植物の栽培により、高野・花園・清水地域が互いに支え合い、平地の少なさを克服	農家による優良品種の発見、産地内での苗木生産、地勢・地質に応じた栽培や「蜜柑方」を起源とする多様な出荷組織の共存による本システムにより、有田地域は日本一の生産量を誇る温州みかん産地に発展

「わかやま布引大根」が地理的表示（ＧＩ）に登録

地理的表示制度とは、伝統的な生産方法や気候・風土・土壌などの生産地等の特性が、品質等の特性に結びついている産品の名称（地理的表示）を知的財産として登録し、保護する制度です。この度、和歌山市布引地域で生産される「わかやま布引大根」が、５月31日、農林水産省から地理的表示に登録されました。和歌山県内の農産物が地理的表示に登録されるのは初めてです。

赤ちゃんパンダの名前が『楓浜（ふうひん）』に決定

令和２年11月22日に誕生した赤ちゃんパンダの名前を全国募集したところ、約11万通の応募があり、選考の結果、『楓浜』に決定しました。『楓浜』も１歳となり、現在、アドベンチャーワールドでは７頭のパンダファミリーがお客様をお待ちしています。

写真提供：アドベンチャーワールド

「太平洋岸自転車道」のナショナルサイクルルート指定

千葉県銚子市から神奈川県、静岡県、愛知県、三重県の各太平洋岸を走り、和歌山市加太に至る延長1,487kmの「太平洋岸自転車道」が５月31日、「ナショナルサイクルルート」に指定されました。

ミシュランガイドに和歌山県のお店が掲載

厳選した飲食店や宿泊施設を星の数などで評価して紹介する世界的ガイドブック「ミシュランガイド」に和歌山県内のレストラン、飲食店85軒が掲載されました。従来から発行されている京都・大阪に和歌山県のお店を追加する形で、ミシュランガイド京都・大阪＋和歌山2022として発行されました。

©MICHELIN

	店　名	カテゴリー	市町村名
＊＊	ヴィラアイーダ	イノベーティブ	岩出市
＊＊	鮨　義心	寿司	和歌山市
＊	鮨　よし田	寿司	上富田町
＊	御料理　竹寶	日本料理	白浜町
＊	オテル・ド・ヨシノ	フランス料理	和歌山市
＊	割烹　恵比寿	日本料理	和歌山市
＊	季節料理　八百亀	日本料理	和歌山市
＊	鮨　宮田	寿司	和歌山市

和歌山県立医科大学に薬学部開設

３月21日に伏虎キャンパスが竣工し、薬学部が開設され、４月６日に１期生となる100名が入学しました。和歌山県では、県内薬剤師の平均年齢が全国に比べ高く、特に紀南エリアは薬剤師が少ない状況にあることから、薬剤師の誕生を期待しているところです。

新宮市に文化複合施設「丹鶴ホール」が開館

新宮市が整備を進めていた文化複合施設「丹鶴ホール」（下本町２丁目）が10月３日に開館。総事業費は約62億５千万円で、最大1,142名まで収容可能な文化ホール、図書館、熊野学の研究室などの機能を備えた文化複合施設が誕生しました。

和歌山城ホールが開館

和歌山市役所に隣接する新市民会館「和歌山城ホール」が10月29日に開館。総工費は約106億円で、５階の屋上庭園フロアからは和歌山城が一望でき、音楽や演劇、講演会などが開催可能な大ホール（954席）と、音楽、小規模演劇などが楽しめる小ホール（395席）を備えた様々な文化活動の発信や交流の拠点が誕生しました。

第45回全国高等学校総合文化祭（紀の国わかやま総文2021）

高校生の創造活動の向上や相互交流を深めることを目的に、全国高等学校総合文化祭が７月31日から８月６日に和歌山県で初めて開催されました。

紀の国わかやま文化祭

文化の国体とも言われる国民文化祭「紀の国わかやま文化祭2021」が和歌山県で初めて開催されました。10月30日から11月21日にかけて和歌山県内各地で約150もの多彩な文化イベントが開催され、和歌山県が文化一色に包まれました。

和歌山県文化賞が決定

令和３年度の県文化表彰の受賞者６人が選出され、文化の向上発展に特に顕著な業績を残した個人や団体を表彰する**県文化賞**に有田川町（旧有田郡藤並村）出身の航空宇宙工学の世界的研究者である**久保田弘敏**さんが選ばれました。その他の受賞者として、**文化功労賞**は和歌山市出身の声楽家・**多田佳苅子**さん、紀の川市出身の国文学者・**半田美永**さんが、**文化奨励賞**には、有田市出身の現代美術家・**伊藤彩**さん、和歌山市出身の能楽師・**松井俊介**さん、和歌山市出身のデザインエンジニア・**吉本英樹**さんが選ばれました。

オリンピックで四十住選手が金メダルを獲得

８月４日に行われた東京2020オリンピックのスケートボード女子パーク種目で岩出市出身の**四十住さくら**選手が金メダルを獲得しました。

夏の甲子園で智辯和歌山高校が21年ぶりに優勝

智辯学園和歌山高校は、大会の４試合全てで先制点を取るなど安定した試合運びを行い、決勝では奈良の智辯学園との兄弟校対決を９対２で勝利し、2000年以来、３回目の全国制覇を成し遂げました。

皆様のご健康とご多幸を
お祈り申し上げます

御坊人形「虎加藤」（紀伊風土記の丘　所蔵）

和歌山県御坊市で作られていた郷土玩具のうち、加藤清正の虎退治を題材にした張り子人形。紀伊風土記の丘学芸員の蘇理剛志さんによると、明治時代にコレラが流行った時には、コレラを虎に見立て、加藤清正が虎退治をした絵が出回ったそうです。

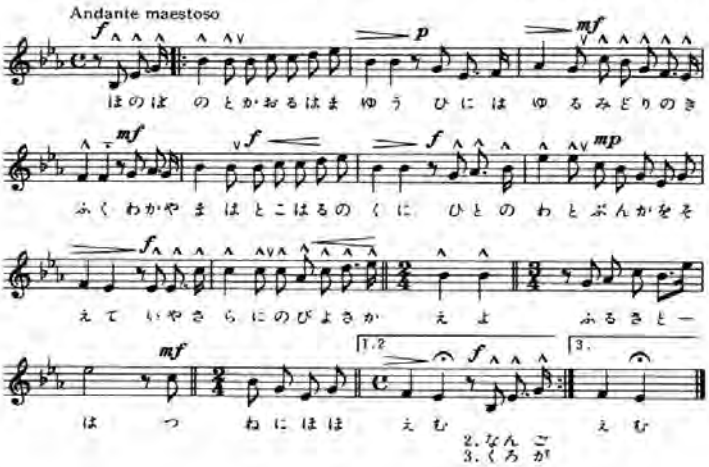
一、
ほのぼのと　かおる浜木綿
陽に映ゆる　緑の起伏
和歌山は　常春の国に
人の和と　文化を添えて
いや更に　伸びよ栄えよ
ふるさとは　つねに微笑む

二、
南国の　息吹ゆたかに
野は稔り　街はおどる
和歌山は　幸を生む国
汗に明け　火花に暮れて
いや更に　伸びよ栄えよ
ふるさとは　つねに微笑む

三、
くろがねの　軌道ゆくところ
黒潮の　しぶきはめぐる
和歌山は　明日を呼ぶ国
とこしえの　若さに乗りて
いや更に　伸びよ栄えよ
ふるさとは　つねに微笑む

和歌山県民歌

西川好次郎／作詞
山田　耕筰／作曲



和歌山県民歌の誕生

戦後間もない昭和23年（1948年）、篤志家から「後世に残るものを何か考えてほしい」と和歌山フィルハーモニック・ソサイエティ委員長の竹中重雄氏が依頼を受けて、県民歌の作詞・作曲の一般公募を行い、同年8月に県民歌が誕生しました。作詞者は、小学校教諭の西川好次郎氏で、県内の市町歌や校歌を多く作られています。作曲者は、「赤とんぼ」「この道」「からたちの花」で有名な山田耕筰氏です。作曲公募の中に優秀作品がなかったため、選者である氏自らが作曲を行いました。

QRコードから
県民歌を聴いてみよう！

和歌山県提供